

Title	東大GCLの学生イノベーション力の育成活動：学生の企画提案を大学が採用・支援することによりイノベーション力を育成
Author(s)	木戸，冬子；國吉，康夫
Citation	年次学術大会講演要旨集，29：99-100
Issue Date	2014-10-18
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/12405
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨

東大 GCL の学生イノベーション力の育成活動

～ 学生の企画提案を大学が採用・支援することによりイノベーション力を育成 ～

○木戸 冬子（東京大学）

國吉 康夫（東京大学）

1. はじめに

わが国では、「第2次大学院教育振興施策要綱」（平成23年8月5日文部科学大臣決定）を策定し、施策要綱に基づき、文部科学省において、平成23年度より「博士課程教育リーディングプログラム」を実施している。東京大学大学院情報理工学系研究科が推進している「ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム（略称：GCL）」（プログラムコーディネーター：國吉 康夫）は平成24年度の複合領域型（情報）で採択されている。

GCL が考えるリーダーは、情報および制度・経済の横串とグローバルな視点で現代の社会・経済システムの動態を理解し、本質的な問題や可能性を発見する能力と技術を有し、さらに問題を解決する能力を有するイノベーション人材である。「先端科学技術のポテンシャルと人々にとっての価値・意味の両方を深く理解し、高い理想と倫理のもとに、新たな社会のビジョンと価値創造のシナリオを描く能力」、「ビッグデータ、複雑システム、ヒューマンシステムの先端 ICT と工学、農学、医学、社会科学の高度専門力を基盤とし、新たな知識社会経済システムを創造的かつ具体的にデザインする能力」、「新しいデザインを具現化するプロジェクトを立案し、ステークホルダーのコンセンサスを得て、世界トップレベルの専門家集団を率い、戦略的プロジェクトマネジメントのもとに、オープンスパイラル型の実践方法論で強靱に推進・達成する能力。また、その方法論自体を創造する能力」、これらのすべての能力を有する人材、イノベーション力を有する学生を育成するのが、GCL の目標となっている。

(<http://www.gcl.i.u-tokyo.ac.jp/courses/overview/>より抜粋)

本研究では、GCL で実施している教育活動の1つとして、学生自身の企画提案を採用・支援する GCL の学生イノベーション力育成活動について、GCL1 期生 (57 名) を対象とした調査結果について述べる。

2. イノベーション力育成活動

GCL で実施している特徴的な教育活動の1つとして、学生自身の企画提案を採用して支援する「イノベーション力育成活動」がある。以下に、学生企画提案によるイノベーション力育成活動の事例を示す。

(1) GCL ニュースレター (<http://www.gcl.i.u-tokyo.ac.jp/gclnewsletter/>)

GCL ニュースレターは、GCL のイベントやコース生の取り組みなどを紹介する月刊の広報誌として、企画・編集・発行を全て学生が行っている。2013 年 09 月にパイロット版 (0 号) を刊行し、毎月発行を続け、2014 年 8 月末時点で 11 号を刊行している。

(2) プレインターンシップ

学生自身が目的・目標・ゴールを設定して、社会イノベーションプロジェクト

(<http://www.gcl.i.u-tokyo.ac.jp/courses/overview/>、【注意1】参照) に繋がるプレインターンシップを企画する。

- ① US 希少難治性疾患患者会調査研究
- ② US 原発対応最先端ロボティクス (The DARPA Robotics Challenge) 調査研究 (図 1)
- ③ UK コミュニケーションロボット調査研究 (University of Hertfordshire)
- ④ UK 臨床心理学調査研究 (The University of Sheffield)
- ⑤ フィリピンにおける社会課題調査研究 など



図 1. The DARPA Robotics Challenge

平成25年度のプレインターンシップの結果、①の調査研究を実施した学生が 11th CVSA Adult and Family Conference にて招待講演。③の調査研究を実施した学生が IPA の「未踏 IT 人材発掘・育成事業」に採択されている。

- (3) 学外の第一線の専門家との討論会
 - 2013/09/12 Rodney A. Brooks vs 東大生
 - 2014/07/24 玉木林太郎 OECD 事務次長講演会
 - 2014/11/15-16 OECD 学生閣僚理事会
(アンドレアス・シュライヒャーOECD 教育局局長が参加予定)
- (4) GCL ランチタイム
GCL 教員と GCL コース生徒が、昼食を持ち寄り、GCL 活動について社会課題についてディスカッションを実施する。
- (5) GCL Executives Lunch
学外の第一線の専門家と社会課題についてディスカッションを実施する。
- (6) 東大 5 月祭企画の実施
 - スタンプラリー：スマートフォンアプリと Bluetooth 通信デバイスによるスタンプラリー
 - ロボット BAR：ウェイターやバーデンドーなどマルチロボットによる BAR

3. 状況と傾向

GCL では、修士課程新 1 年生の志望者の中から毎年 60 名程度選抜し、さらに修士課程 2 年に進級する時点で、GCL に残る学生を 20 名程度選抜する。平成 25 年度は 57 名中 20 名が GCL の 2 年に進級しているが、20 名中 18 名 (90%) がイノベーション力育成活動を実施している。また、GCL に残らなかった学生でイノベーション力育成活動を実施した学生は 37 名中 1 名のみ (≒3%) である。

イノベーション力育成活動の成果として、イノベーション力育成の度合いとの相関については、育成度合いの計測方法が確立されていないこともあり、本稿で言及していない。しかし、イノベーション力育成活動への参加状況と修士課程 2 年生への進級については相関性が高いと言える。

4. むすび

本研究では、平成 24 年度より東京大学大学院情報理工学系研究科が推進している「ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム」に関して、学生企画によるイノベーション力育成活動の状況から見た傾向について、GCL の 2 年への進級について相関関係を分析した。GCL の目指す学生像として、ある意味当然ながら、積極的に企画して参加する学生については、GCL の 2 年として進級する度合いが高く、また、リーダーを目指す学生の一面が把握できた。しかし、イノベーション育成するという観点で、イノベーションの育成度合いを計測してより詳細に捉えることも必要であり、計測方法論の確立が求められる。また、GCL では、9 研究科 17 専攻という幅広い学生を受け入れているが、研究分野 (専攻) により、イノベーション力育成度合いの状況やイノベーション力育成パターンに差異があるかどうか、といった観点も必要であると考えられる。これらについては、今後の研究課題とした。

参考文献：

日本学術振興会「博士課程教育リーディングプログラム」HP

<http://www.jsps.go.jp/j-hakasekatei/>

東京大学「ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム (GCL)」HP

<http://www.gcl.i.u-tokyo.ac.jp>

データ (GCL 1 期生, 57 名中 20 名進級)：2014 年 4 月 1 日時点

第 1 期生 (修士 2 年)	人数	女性 人数	女性 比率	外国人 人数	外国人 比率	女性かつ 外国人数	女性かつ 外国人比率	他大学学部 出身者人数	他大学学部 出身者比率
	20	6	30.00%	2	10.00%	1	5.00%	14	70.00%

GCL 1 期生・所属専攻：情報理工 5 (コンピュータ科学 1, 電子情報学 2, 創造情報学 2), 学際情報学 9, 総合教育科学 2, 経営専攻 1, 健康科学・看護学 2, 公共政策学 1.

GCL 1 期生・学部出身大学：東京大学 6 名, 慶應大 3 名, 以下は各 1 名：京都大, 大阪大, 東工大, 早稲田大, ICU, 上智大, 多摩美術大, 京都文教大, 東京農工大, ミネソタ大, 中国天津.